

よき様に言て力を添けれど、實はかゝる病體にて、とても本復の頼みあるべからず、汝が心中察し入たり、玄かし中納言卒せられたりとも、家光かくてあれば、こゝろ安かるべしと宣せたまひて、還御なれば、忠宗感涙を流して拜送し、政宗は合掌して聲さへたてず、ふしおがみつるとぞ。

〔嚴有院殿御實紀附録上〕松平式部大輔忠次が病あつきよしきかせたまひ、醫官奈須玄竹恒正をつかはされ、療養せしめられ、日ごとに玄竹めして、その病體を問せたまふに、忠次いさ、かも粥などす、るよし聞せらるれば、公にも御心ちよげに見えさせたまひ、ひたふるに箸も下さずなど申す時は、殊の外御けしきよからぬ様に見奉れば、忠次もこのよし承り、かしこきの餘り、強て飲膳をす、めしとぞ、忠次閥閥の名門なるのみならず、公のいまだ儲副におはしませし時より、附そひ奉りしかば、諸老臣の中にも、とりわき親しみ思しめされし故、かく御憂念ありしものなるべし、史館日録

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年二月四日、西城に高家鴈間詰、奏者番出て伺ふ、けふ本城の奥に渡り給ひ、淨光院殿家母御病をとほせ給ふ、

〔柳營秘鑑二〕病氣御尋并御悔之上使奉書御香奠之次第

一御三家井國持衆病氣大切之節、爲御尋。上使被遣之、御三家へハ老中國持へハ御奏者番被相越老中病氣之節ハ、御小姓衆被遣之、何も品ニハ賜物等有之、但國持之面々在國之時病氣大切之節御尋之奉書、宿次を以被下之、國持之外も、御三家之庶流杯も品ニハ被下之事も有之、

〔文昭院殿御實紀七〕寶永七年閏八月二日、尾張黃門の病をとほせたまひ、御側水野肥前守忠位もて鯛をおくらせたまふ、

〔嘉永明治年間錄五〕安政三年七月廿二日、下田奉行、物ヲ贈テ亞人コモトールノ病ヲ問フ、此日御小人目付堀井鐵藏一人罷越、此方昨夕歸リ後、コモトール不快の儀、奉行へ申聞候處、奉行